

富山大学医学部同窓会報

2012. 第21号



富山大学医学部同窓会報

2012. 第21号



C O N T E N T S

- 4 . 大学に求められる教育の充実と本学の課題 学長 遠藤俊郎
- 5 . 附属病院長あいさつ 附属病院長 井上 博
- 6 . 変わるものと変わらないもの 会長 高田良久
- 7 . 富山大学医学部同窓会による東日本大震災への取り組み
理事長 田淵英一
東日本大震災手記 附属病院危機管理医学助教 松井恒太郎
東日本大震災医療支援報告 附属病院 薬剤部 村崎善之
東日本大震災医療支援チームに参加して
医薬系病院事務部
総務企画グループ病院運営企画チーム 主幹 武田正夫
東日本大震災 DMAT 活動
附属病院 ICU 看護師 長澤宏美 (看護学科 平成13年卒)
- 14 . 平成23年度(第30回)富山大学医学部同窓会総会を開催しました
- 17 . 〈特別寄稿〉
同窓会が繋げてくれた縁
富山協立病院内科医 川端康一 (医学科 平成15年卒)
- 19 . 同窓生が一体となって富山大学医学部附属病院の
発展をサポートするために
附属病院専門医養成支援センター 副センター長 石木 学 (医学科 平成4年卒)
- 20 . オンライン同窓会名簿が始動しました！
- 21 . 医学部新看護学科研究棟の完成を記念して
看護学科長 竹内登美子
-

染色工芸家。太平洋美術展・新人賞(1982年)、松吉賞(1984年)、太平洋美術会賞(1998年)受賞。各地工芸画廊をはじめ、日本橋高島屋(東京)、現代工芸藤野屋(栃木県佐野市)などで個展を開催している。また、1994年とちぎの美術女流作家100人展にも選ばれる。1999年銀座松屋にて個展を開く。いずれも好評を博す。栃木[蔵の街]音楽祭協力委員として地域文化活動にも貢献。縁あって本同窓会誌の表紙絵を1997年より依頼している。栃木県岩舟町在住。

-
- 22 . <卒業生教授就任挨拶>
愛知医科大学へ赴任して
愛知医科大学医学部麻酔科学講座 畠山 登 (医学科 平成元年卒)
- 23 . 8期生(昭和58年入学+平成元年卒業)同窓会の開催
長谷川 豊 (医学科 平成元年卒)
- 24 . 10期生同窓会顛末記
飯塚病院東洋医学センター漢方診療科 田原英一 (医学科 平成3年卒)
- 26 . <訃報>
常木清先生が残してくださったもの
青梅市立総合病院神経内科 高橋真冬 (医学科 昭和60年卒)
- 27 . 第63回西日本医科学生総合体育大会
- 28 . 平成23年度富山大学附属病院関連病院長懇談会議事要旨
- 29 . 平成22年行事報告・平成23年行事・平成24年行事予定
- 30 . 平成23年度第30回医学部同窓会総会議事録
- 34 . 富山大学医学部同窓会会則
- 38 . 平成22年度会計報告・平成23年度収支予算・平成24年度収支予算案
- 40 . 職掌分担・評議員一覧
- 42 . 医学部人事消息
- 43 . 編集後記
- 45 . 富山大学医学部同窓会オンライン名簿システムについて



大学に求められる教育の充実と 本学の課題

学長 遠藤 俊郎

近年、日本人特に若者の知識力や人間力について、その低下や変化を指摘、危惧する声が小さくありません。医療の領域においても同様で、元気で的確な自己発信のできる学生・若手医師の数が少なくなったとの印象が拭えません。このことは、研究面での科学論文数や大学院生数の減少、臨床現場で垣間見る若手医師の総合力の低下、更には地域・診療科など様々な分野での医師偏在そして医師不足など、最近の社会的現実にも関連するものと考えています。将来の日本を背負う人材を如何にして育成していくか、我が国にとって最も真剣に取り組んでいかねばならない最重要課題であると、私は思っています。

私は、2011年4月に富山大学学長を拝命し、1年が経とうとしています。様々な課題と取り組む中で最も強く思うことは、優れた人材育成を果たすための教育こそが大学・大学人の最大の責務であり、本学においても医学部を含む全学部、全部局に共通する課題であることです。教育課題について3つのポイントがあると考えています。一つは専門教育と教養教育の融合により、教養部廃止後からの日本の大学で失われてきた人間成長を図る機能を取り戻すこと、二つ目は、単独で存在する情報を取捨選択し、結びつけ、体系化できる“真の知識”を創出できる能力の獲得です。現状の教育体制では、情報・エレメントの獲得のみが評価の対象となり、本質的な“考える力”が失われてきています。国家試験合格がゴールとなるような教育体制は正していかなばなりません。三つ目は、最近入部者が減少傾向にある部活動の勧めです。部活動は、目標達成のため自らが戦略・プロセスを企図・実践する力を育てる格好の舞台と思っています。

国民国家の発展という狭い枠組みの中でその役割をなせば良かった時代から、世界的競争に対応できる人材育成に視点を移した多様性を持った教育の時代へ、大学はまさに変革の時を迎えています。我が国の大学が培ってきた伝統と歴史は尊重しつつ、旧来の大学の概念に固執することなく、新しい世界展開に適合できる発想転換と行動力が求められています。富山大学は、独立法人化後の全国国立大学における最大の改革、3大学統合を実現した大学であります。3大学統合がもたらした様々な負の要因を克服し、新たな大学を創造することに力を注いでいかねばなりません。医学部同窓会の皆様からも、引き続きご指導ご支援頂きますよう宜しくお願い申し上げます。



附属病院長あいさつ

附属病院長 井上 博

附属病院では平成23年1月、新しい南病棟の稼動が始まり、6診療科が移転しました。広いスペース、機能的な設備配置、6人部屋の解消(最大4人部屋)、個室の増加、周産母子センターのNICU(新生児特定集中治療室)・GCU(回復治療室)の増床、第二内科のHCU(重症患者集中治療室)の新設など、特定機能病院としてふさわしい病棟となりました。1階の食堂、売店などのスペースも広くなり、多目的ホールも十分な広さを持ち、患者さんばかりではなくご家族やお見舞いの方にとってもくつろげる空間として利用されています。

特に卒後の2年間、研修を行う研修医諸君には、広い研修医ルームをはじめシャワー室、仮眠室、ロッカー室、スキルス・ラボ(実技を練習する各種シミュレータを配備)を揃えました。研修環境は随分と改善されました。

平成23年の震災のため旧病棟(旧東、西病棟)の改修工事の着工が遅れておりましたが、いよいよ平成24年1月末から改修工事が始まりました。一人当たりのスペースを広げるため改修期間中は病床数(基本612床)が50床から最大80床余り減ることになります。平成25年8月に改修工事は完了し、入院の療養環境は格段に改善されます。旧病棟の改修に加えて今年新たに取り掛かる事業として、まず災害救急センター(仮称)の設置が挙げられます。8病床を確保し特定機能病院としてふさわしい救急医療を平成24年の8月から提供できるようになります。次に総合人材育成センターを建設いたします。国・県からの地域医療再生臨時特別交付金に自己資金を加え、3階建ての建物を救急外来の西側に建てます(平成25年3月竣工予定)。災害医療に携わる人材やその他の医療分野の人材を育成する場を提供できることとなります。災害等の緊急時には、ここが対策本部の機能を持つよう計画されています。

富山大学附属病院は徐々にではありますが機能、アメニティーを改善しており、医学生・看護学生にとってこれまで以上に整った環境下で勉強できるようになります。

同窓会会員の皆様におかれましては、今後とも、ご指導・ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

変わるものと変わらないもの

会長 高田 良久

創立三十周年を迎えた富山医科薬科大学・富山大学医学部同窓会総会は、思いのこもった会になった。山本恵一第一外科学初代教授、伊藤祐輔麻酔科学初代教授のお元気なお姿に接することが出来たのは幸いだった。はるばる鹿児島から馳せ参じてくれた一期生の原口兼明君、ようやく登場ともいべき同じく一期生の西条寿夫第一生理学教授、出席有難う。懐かしい面々と富山で一緒にいると、学生時代のような気分になってくる。もう自分の子供たちが当時の自分たちの年齢になっているというのに……。その子供たちと同じ年齢の現役の学部生有志の声を聞くと、同世代に共通の気質のようなものと、独自の問題とがあるようだ。

いずれにせよ、20代前半の若者から、80代の大先輩まで、富山医科薬科大学、富山大学医学部同窓会の名の下に集い、語りあえたのは素晴らしい。こうした語らいから、本学の何かが生み出されていくことを切望する。

東日本大震災からの復興を含め、わが国の今後をどうするか、池上彰氏は「先送りできない日本—“第二の焼け跡”からの再出発—」との本を著している。もちろん第一の焼け跡は大東亜戦争の空襲、B29が落とした焼夷弾による焼け跡であろう。

圧倒的な破壊を目のあたりにしたら、たしかに人は謙虚になるだろう。そして秩序を保って助け合う。諸外国の人々が驚嘆するわが国のよき国民性である。

一方、永井龍男は小説「石版東京図会」で、関東大震災、大東亜戦争を経て、崩れいく江戸・東京の生活文化を悼んでいる。

大きな異変を経て変わるものと変わらないもの。

先日横浜を訪れ、思い立って保土ヶ谷駅東口から11系統のバス、桜木町駅行きに乗った。横浜のいわば下町から、開港地横浜の面影を色濃く残す山手本通りへと、横浜の違った表情をたどることの出来る面白い路線である。驚いたのは、中村橋から平楽への急坂を上りきったところに、金網で仕切られた米軍住宅がまだ広がっていたことだ。わが国にありながらわが国ではない所。そのように、わが国と一線を画すアメリカが、戦勝国としてわが国にもたらしたものは、天変地異とはまったく違ったものだったはずだ。

三十周年の同窓会総会で、「富山医科薬科大学・富山大学医学部教員 OB 有志一同」を代表し、山本先生から記念品を頂戴した。金沢の伝統工芸を活用したUSBである。何をすべきか、問いかけだけは行ってきたが、つまるところ会報の発行や式典への協力など、いわばルーチンワークに終止してきた会の会長にとって、恐縮極まりないお心遣いである。「とにかく続けてきた」ことを認めてくださった、わけであろう。恩師は有難い。これを励みに、いよいよ本会ならではの事業、同窓という変わらぬ絆で結ばれた者たちの思いをこめた事業に取り組みきたいものだ。会員諸氏、役員諸氏の一層のご指導、ご協力をよろしくお願い申し上げます。

富山大学医学部同窓会による東日本大震災への取り組み

理事長 田 渕 英 一

平成23年3月11日に発生した東日本大震災より、もう一年が経とうとしています。とくに津波による被害は甚大であり、すぐに全世界に発信され、全国の、そして世界中の人々を驚愕させました。私のところにも国内外から多くの安否のメールが届きました。本会員の中にも、直接的・間接的に被害に遭った方がおられることと存じます。心中お察し申し上げます。

私の出生地は、父親の仕事の関係で岩手県遠野市です。幸い遠野市は海岸よりも少し山手にあり、被害は少なかったようですが、今回のニュースでご存知の方も多いと思いますが、幼少時に過ごした陸前高田市は壊滅的な被害を受けました。私がいた頃(1960年後半)には、父親が素手で蟹や鮑を捕れるほどにのどかな田舎町でした。その街が漸く近代化した矢先に崩壊し、さらには多くの人々が一瞬で犠牲となり、改めて自然の脅威を世界中の人々が実感したことと思います。

さて、本同窓会における東日本大震災への取り組みをお知らせいたします。

まずは、震災直後にメール配信にて緊急理事会を開き、支援策を模索しました。様々な意見が飛び交い、本会でできる最大限のことをしようという意見もできました。その中で、本同窓会として何をなすべきなのかという議論となり、最終的に「母校の発展並びに医学の進歩に寄与する」という本同窓会の主旨に基づき行動することで意見が一致しました。言い方を変えると、同窓会本来の業務もある中で、会の趣旨から逸脱する行為はしないことになりました。

この期に並行して、遠藤元病院長より、「富山大学医学部・附属病院では、医療救護班の派遣をすることが決まったが、資金がなく募金活動をしており医学部同窓会からも援助していただけないだろうか」という連絡を受けました。そこで、急遽、理事会を開催して100万円を寄付することになりました。そして、次年度も医療救護班を派遣する場合には、医学部同窓会より100万円支援できるように予算に組み込みました。

このような経緯により、富山大学附属病院東日本大震災医療支援チームが結成され、平成23年3月以降数回に分けて被災地への医療支援が行われました。

また、平成23年6月29日に行われた医療救護班による活動報告会にて、井上博附属病院長より医学部同窓会へ感謝状が送られました。

ここに、実際に医療支援を行われた方々のうち代表で4名の方より、活動の様子について原稿をいただきましたので掲載いたします。

富山大学附属病院東日本大震災医療支援チームの皆様におかれましては大変ご苦労様でした。